

鳥取夏至祭という現象

－ 即興音楽とダンスに着目した祭の自発的な創出 －

木野彩子*

Tottori Midsummer Improvisation Festival

How we can make spontaneous creativity with Dance and Music Improvisation?

KINO Saiko*

キーワード：鳥取夏至祭，即興，コンテンポラリーダンス

Key Words: Tottori Midsummer Improvisation Festival, Improvisation, Contemporary Dance

I. はじめに

鳥取夏至祭（以下夏至祭とする）は2017年より鳥取市中心市街地を中心として開催している即興音楽とダンスによるフェスティバルである。2016年にまとめたコミュニティダンスに関する3論文による考察の結果、アーティストの自発的な活動を促す仕組み作りを目指している。英国のコミュニティダンスのように助成金のみで頼る運営の形では継続性が得られず、真に自発的な主体は育たないのではないか（木野, 2016）。おそらく多くの人に関わり参加していくようにするためには日本の祭というシステムが有効なのではないか（木野, 2017a）。職業的ヒエラルキーをなくし、全ての人々が表現者であり芸術家であるとするにはどうしたらいいのか（木野 2017b）。これらを実践するために筆者は即興¹というジャンルに着目し、まちなかでの祭を主催した。また、夏至祭をきっかけに子どもたちとともに身体を用いて遊ぶところからワークショップ手法を学んでいく『即興音楽とダンスのワークショップ』を開催しはじめ（文化庁大学における文化芸術推進事業の一環として）、普及・周知に努めている。3年が経過し、様々な問題点も明らかになった。3年間の変化を見据え、今後鳥取夏至祭の目指すような「自由な表現活動」と「それを許容する社会」を作り出していくにはどうしたらいいのか、1市民であり1アーティストとしての視点から述べたいと思う。

II. 先行研究

夏至祭のようにまちなかで開催されるダンスや音

楽のパフォーマンスは近年急増している。これらの中には1970年代に寺山修司をはじめとするアンクラ演劇や舞踏の目指した市街劇や脱劇場の流れとは異なり、まちの賑わい作りやジャンルの周知などを目的としている。その多くが市や県などの助成金を得て運営しており、規模も大きい。会場として史跡や公共スペース、公園などを利用しており、馴染みの場所が劇場化することで観客も思わず立ち止まり見ることとなる。筆者が関わったのは横浜ダンス界限²（BankART, 2004年～）、ダンコレおそとダンス³（横浜市芸術文化振興財団, 2007年～、現在は青空ダンスという名称に変更）だが、別府混浴温泉世界⁴、静岡ストレンジシード⁵、六本木アートナイト⁶、枝光まちなか芸術祭⁷、など多数上がる。また遠田誠『東京街ダンス』や城崎アートセンター制作による『カラララブソディ』のようにアーティストも自身の興味関心からまちなかへ出ていく傾向があり、その場所ではしか行うことができないサイトスペシフィックな作品は一種の流行ともなっている。しかしながらこれらは基本的に作ってきた作品を外で発表する、あるいはその場所に合わせて歴史背景を踏まえて作品作りを行うというもので、即興に特化しているところは夏至祭の特徴でもある。「その場で何が起こるかわからない」ことを楽しむという究極の遊びでもある。

大道芸もストリートパフォーマンスの一種であるが、野毛大道芸⁸、静岡大道芸ワールドカップをはじめとする大道芸フェスティバルは投げ銭の他にフェスティバルから出演料が支払われる形になっており、

*鳥取大学地域学部国際地域文化コース、地域学部附属芸術文化センター

それゆえ海外からも多くの大道芸人たちが集まるようになっていく。また大道芸も間の繋ぎ方や観客をひき入れる工夫などに即興的要素は見られるものの、基本的に魅せる技は固定しており、構成も決まっているため作品と呼ぶべきものになっている。その点ではまちなかに急増する前者のようなパフォーマンスと等しい。

夏至祭はもともと北欧を中心に開催されてきた夏至の日に開催される音楽祭に発想を得ている。筆者が居住していたフランスでは *fete de la musique* という名称で、まちなかに人が溢れ、そこかしこで音楽（即興とは限らない）が演奏され、歌い、踊り、夜を明かす。1982年パリで始まったこの祭りは世界中に広がりつつある。

現在、夏至祭は学生を含む実行委員会で運営しており、最低限の交通費のみしか支給されないという状況ではあるが、鳥取に興味を持ち、魅力を感じるアーティストが集う場となっている。そのため鳥取という街の再発見や町おこしのために行なっているというよりも、参加者同士の出会いを目指しており、実際にここで培われたネットワークによりお互いの舞台に出演しあうことなどが起きている。

即興というジャンルは演劇やダンス創作の基礎であり、トレーニングの一種でもある。自然に、そのまま反応すること、相手や環境から起こる変化を楽しむこと、様々なシアターゲームに織り交ぜられるなど一般に広まっている。チクセントミハイの提唱するフロー概念を踏まえれば「何が起こるかわからない」「特殊な緊張感」を保った状態で普段の自分とは異なる自分の領域に達するための集中の作り方であり、プロかアマチュアかあるいは経験の有無は関係なく誰もが参加できる可能性を持つ。観客を巻き込み、巻き込まれ、その境目を無くしていくことを目指す時に即興性は外すことができないと考えた。

即興音楽とダンスの会を想定して開催し始めたが、実際の参加者は映像、書写、詩の朗読なども含み、あらゆるジャンルの人を受け入れる形となっている。音楽もダンスも美術などの表現も本来人が生きる上で行うコミュニケーションの1つに過ぎず、呼吸を行うように、対話を行うようにエネルギーを交歓していくことと捉えている。基本的に来たいと言う人はできる限り受け入れるようつとめているアンデパンダン型と言う点でも他のフェスティバルと異なり、特殊なかたちとなっている。

Ⅲ. 本論文の目的と概要

鳥取夏至祭の3年間の変遷をまとめ、今後の可能性を示唆する。

Ⅳ. 鳥取夏至祭の変遷

基本的な枠組みは3年間変わっていない。出演者同士も初めて会う人も多く、出会いからまちなかで学び、この土地の人に得たもの（新しい種）を配るところまで3日間通して体験していく。

スケジュール

1 日目前夜祭（はじめましての自己紹介）

くじ引きによる即興ダンスと音楽のセッション（オービタルリンク、中沢れいさん発案）、その後交流会を開催した。

- 1 くじ引きにより3人組を作る
- 2 各自が2分ずつ即興を行う
- 3 その3人でセッションを行う

2 日目周遊型パフォーマンス（まちを知る）

野外でのパフォーマンスをガイドとともに歩き回りながらまちなかを探索していく。

3 日目ワークショップ（まちの人にてあう）

10時：鳥取駅前サンロードで開催されているいなばのおふくろ市に出現。

1時30分：わらべ館いべんとほーるにてワークショップ（晴天時には階段、わらべ夢ひろば含む）

1. 2017年

初年度ということもあり、実行委員会形式ではあるものの、その準備のほとんどを自身で行うこととなった。駅からほど近い当時空き物件だった旧ヤマネデンキ（現office21）を借り受け、拠点とし、周辺の公園、公共スペース、空き店舗などの使用許可を受けておき、その中からアーティストたちにパフォーマンススペースを選定してもらった形をとした。



図1：夏至祭20171日目（旧ヤマネデンキ）

以下写真は全て田中良子

決定後、その場で地図を作成、観客に配り出演者とともに移動しながらパフォーマンスを見てもらう。

鳥取中心市街地の主な場所をめぐる形になっており、その映像は youtube でも公開されている（制作：佐々木友輔）。

多くのメディアが取り上げてくれたことと、学生無料としたこともあり、集客面では 3 年間で一番多かった。しかし、中には湖山から鳥取まで行く交通費（往復で 380 円）が払えませんという学生もおり、翌年は学内で開催することを検討することとした。

周遊型公演の開催地（☆印）及びその候補地：

交通公園、鳥取駅南口河原沿い、☆けやき広場、☆風紋広場、地藏堂、ミドリビ、☆太平公園、☆旧横田医院、☆パレット鳥取、☆パレット鳥取の隣のビル、☆アフターアワーズ、SAKAE401、☆袋川土手

参加者の声：

- ・ 日本にも様々な活動を行っているアーティストがいて、様々な人が奮闘しているのだと思い、こちらも元気を頂きました。
- ・ 踊りが始まるのが、どうだろうが関係なく話を続けてくる気さくな鳥取の人には驚きました。
- ・ 東京以外で踊ることの価値を知りました。踊りと音楽の根源的な力を思い出せました。
- ・ 学生たちにもっと還元できればと思いました。この年は観客へのアンケートを行っていない。



図 2：夏至祭 2017 2 日目の様子

周遊で 60 人ほどの人が一斉に歩いていること自体がパフォーマンスと驚かれた。

2. 2018 年

中心市街地活性化協議会による助成を受けチラシやポスターの作成費用に充てさせていただくとともに、使用場所へお礼を支払うようにした。鳥取銀河鉄道祭のことも含め、会場をとりぎん文化会館周辺とし、比較的広域の周遊となった（しかしそれ

でも予定していた範囲を回りきることはできなかった）。体力的にも時間的にも限界に近く、欲張りすぎた点は否めない。2 年目ということでもとりぎん文化会館、県立博物館（入り口正面の大階段）など公共スペースからの協力が得られるようになったことも大きい。一方でそれゆえにほぼ全ての場所が実行委員側によりあらかじめ許可を取っておく形となった。この年度よりわらべ館と協働により、『即興音楽とダンスのワークショップ』を継続的に開催することとし、さらなる即興音楽とダンスの普及を図ることになった。



図 3：夏至祭 2018 2 日目（鳥取県立博物館）

この年から前夜祭を鳥取大学内で開催することとし、興味のある学生さんがきやすくなるようにと設定した。また、2 年目ということもあり、1 年目に観客としてきていた学生から出演者、スタッフが出てきて広がりを見せた。一方で市民の参加は少なく、またメディアにもほとんど取り上げられることがなかった。

また、佐分利育代名誉教授の協力のもと、鳥取のインクルーシブダンスグループ「星のいり口」とイギリスの振付家、アティーナヴァーラによるサイトスペシフィック作品も風紋広場にて上演した。（あいサポート障がい者アート活動支援事業、協力：ミュージックカンパニー）



図4 夏至祭 2018 3日目

(星のいり口によるパフォーマンス)

周遊型公演の開催地(☆印)及びその候補地:

☆とりぎん文化会館フリースペース, ☆同中庭, ☆ギャラリー鳥たちの家, ☆tottori カルマ, ☆真教寺公園, ☆鳥取ペインクリニック, ☆五臓園ビルギャラリー, ☆わらべ夢広場, こぶし館, ☆鳥取県立博物館, 鳥取城跡

参加者の声:

- ・ 道が広くそれぞれに個性もあり,道に可能性を感じました。
- ・ 3日間の凝縮ツアーならではのメンバーの多様さやお祭り感があるということを感じた。
- ・ これからはダンサーが拠点に縛られずに様々な場所を訪れ,吸収して自分の生活に活かす時代なのだと言った参加者のみんなと話をして思いました。
- ・ 場と共演者でいろんな方向でフルに楽しみ切る。それぞれがそれぞれを受け入れた上で怒涛にやる,という時間だった。
- ・ また是非とも,鳥取を訪れたい。

観客の声

- ・ 芸術とはなんなのかわからなくなった。自分の作っていた芸術のありようが覆された。
- ・ 芸術は一人で見るものではなく共有することでより楽しめると気づいた。
- ・ 困惑半分,興味半分,しかし力技で感情を共有させてしまうのがすごい。
- ・ 本当に自由なんだという驚き。

3. 2019年

自立して継続的にこのお祭りを継続させていくことを考え,中心市街地活性化協議会の助成を受けることをやめ,自力での開催に戻すことにした。月一回

程度の実行委員会を開設したこともあり,学生スタッフが充実し,学内の周遊について,また許可申請なども学生が主体となって行うようになった。また,このメンバーの多くが『鳥取銀河鉄道祭』⁹(2019)と合わせて参加するようになり,サークルや自身の創作実践活動につながる良き経験になったと思われる。

周遊型の場所をコンパクトにまとめ,移動距離を減らしたことでスムーズな運営が可能となった。周遊型については駅から遠いなどの理由から集客が一桁にすぎなかったという問題があり,特に学生の参加は無料イベントのワークショップに集中するという残念な結果な形となった。

フルート奏者 Miya のファシリテートによるワークショップ(旧横田医院)はブッチモリスの指揮サインをダンスにまで拡張していく試みで,2012年ごろ筆者も含む Tokyo Improvisers Orchestra(TIO)で行っていたものを応用した。東京から鳥取へ移転する一つの兆しと捉えている。

3年目ということもあり,まちのことに詳しい出演者が出てきて,皆を案内するなど会の運営をサポートするようになった。また,まちの方が覚えており,特におふくろ市出店者及び新駅前商店街組合の皆さんの温かい声かけにアーティストたちは喜んでいた。



図5:夏至祭 2019 3日目(いなばのおふくろ市)

周遊型公演の開催地(☆印)及びその候補地:

☆樗谿公園, 梅鯉庵, ☆おうちだにグランドアパート, ☆鳥取東照宮

参加者の声:

- ・ 自分の身体に向き合えるだけの空間的,時間的,精神的ゆとり,空白,余白,余剰が鳥取には多分に溢れていて,東京には少ないと感じます。ゆとりの少なさは切迫感,強迫観念,自己責任感とも直結しており,日常生活のフィールドにおける他者への厳しさ(と同時に無関心)が積み上げられていき,その上に現代日本のあらゆる社会問

題が位置しているように思います。

- 「夏至祭」というコンセプトと上演場所、この大枠のもと、ひたすら街や人にかかわっていくという点が特徴的だと思いました。芸術監督を立てた場合は、一本筋の通った演目やワークショップ(例えば、周遊型イベントにある種のストーリーを敷くなど)になっていたかもしれないが、そこは敢えて今年集ったパフォーマーにゆだねられていた。コミュニティイベントに創造的な質をどのように担保するか、自分も含めてパフォーマーとしての姿勢が一層もとめられていたようにも思った。

観客の声

- 即興やダンスはこれまであまり関わりのないジャンルだったので新鮮で楽しく、いい経験になった。
- 終演後直接話すことでよりよくわかる機会になった。
- ダンスは見るものではなく踊るものである、この回は参加するものであるということ自体が発見。

表 1：参加者の推移

| | 2017 | 2018 | 2019 |
|----------|-------|-----------------------|-------|
| 出演者(学生) | 29 | 32(5) 他に星のいり口(20名) | 28(3) |
| 学生スタッフ | 授業の一環 | 12 | 16 |
| 観客・WS参加者 | 250 | 200 | 180 |

これら3回を続けて行ったことで、私自身も多くの街の方に出会い、またお話しさせていただいた。踊ることができる場所を開拓することにもつながった。これまでのパフォーマンスを行ったり、関わっていただいた箇所を地図上に配置すると以下ようになる(図6)

星のように点在しており、筆者(及びアーティスト)自身がマレビトとして場所と人を開拓していくというのが『鳥取銀河鉄道祭』(2019)の考え方のベースとなっていく。2019年は特に現在進行形でワークショップやリサーチが進んでおり、これについては別途まとめる。



図 6: まちなかのパフォーマンス可能なスペース

(☆印,2019年チラシより転載)

V. 問題点と今後の課題

1. 鳥取夏至祭の理念及びその意味するところ

初年度より掲げてきた理念はHP上にも掲載している。「わたしたちは踊りたいから踊り、奏でたいから奏でる。音楽もダンスも美術も。今、ここで作り出されるその瞬間を楽しむために、即興に着目し、劇場を抜け出して街の様々なところではじめてみます。音楽家もダンサーもアーティストも観客も通りすがりの町の人も一緒に巻き込み巻き込まれ、そうして新しい何か生まれます。かつては音楽もダンスも人生も切り離すことのできない一つのものでした。プロもアマチュアもジャンルも垣根を越えて、ただ遊ぶところから。それが鳥取夏至祭の理念です。」

筆者は鳥取にダンスの専門家として赴任したが、ダンスにプロもアマもない。ただ踊るか踊らないかであり、踊りの概念が膨らむコンテンポラリーダンスというジャンルにおいて、その区分けはできなないと考えた。テクニック(技術)や特殊な身体はなくともできることはある。実際にそのようなことは多々起きてくる。



図7:ダンサーを床に貼り付ける観客
(旧ヤマネデンキ)

初年にあたる2017年,ダンサーにいきなりガムテープを差し出されておろおろする観客がダンサーを床に貼り付ける様子(図7)やダンサーが踊っていたところ,通りがかりの女性に褒められ,コーラを渡されたので,花を贈った様子(図8)が見られた.そこには心温まる交流があり,即興ならではの対応が見受けられた.



図8:観客に花を贈るダンサー(パレット鳥取)

コンテンポラリーダンスにおいて劇場内で行う公演においても観客を含めたアマチュアが舞台上がり各々の動きを披露するということが増えている。(『振付のアクチュアリティ』)そこで行っているのは新しい身体観の発見であり,発想の違いや身体の違いに面白さを見出すのであれば,そこに垣根はないはずだが,一般にダンスは「特別な人がするもの」と思い込まれており,その先入観により敬遠されがちなのではないかと捉えられた。「私は運動できないから」「身体硬いから」と諦めてしまっていることがダンス苦手,ダンス嫌いを作ってしまうのではないだろうか.ダンスの可能性は即興まで落とし込むとかなり広がると思われる.

寺山修司は1960年代後半から70年代にかけて市街劇と称して街中を周遊して回るパフォーマンスを行った.あらすじや展開が決まっているものもあるが,『ノック』(1975)では何も決まっていなまま家をノックし,その場に出てきた人(つまり役者ではなく一般人)と役者との即興が展開するというものであったという.鳥取夏至祭ではそこまで積極的には動いていないが,プロとアマの垣根がなくなっていく,そんな瞬間を目指したいと思っている.

2. プロフェッションの前の「遊び」に戻すということ

プロフェッションを否定するというのはアーティストとしてはとても心苦しい.しかし遊びの現場ではプロかアマかを考えないで一回捨てることは不可欠である.プロであればあるほど美しく見せなければいけなかったり,まとめようとしていたり,笑いを取るうとしていたりする.「魅せること」にとらわれてしまうが,それを一回忘れ,自由さを取り戻すことがアーティストたちの普段の活動場所ではないこの鳥取であればできるのではないかと考えた.そもそもダンスを踊っていて楽しいと思ったことが筆者はほとんどない.筆者自身が特殊なのかもしれないが,楽しいからというよりもせざるを得なくてしてきた結果であり,それが指し示された道であっただけで求道や宗教の感覚に近い.その中で,かつて即興で自由に踊ることができていた時代を思い出し,多くの人に踊る楽しさを味わってもらうために考え出したのがこの祭りである.そもそもパフォーマンスでお金をもらうことの意味をアーティストそれぞれに考えてもらうべく,観客が気に入ったアーティストを指定してキャッシュバックできるよう代替通貨としてボタンを用意,プチパトロンシステムと名付けた.お金のやりとりが重要ではなく,ボタンを渡す行為により,観客とアーティストが直接話す機会を作っている.アーティストにとっては観客と交流をすることの喜びを思い出すための機会でもある.アーティストは収入になるから踊るのだろうか,演奏するのだろうかという純粋な疑問提示でもある.

3. 祭とは

祭りとは本来氏子たちが寄付を集めて,自分たちの楽しみのために運営してきたものである.それが楽しいからこそ,地域コミュニティの形成に役立ってきたが,一方でその負担が重荷に感じるなどの問題

も起きてきている。現在過疎地域を中心に多くの伝統芸能や祭りがなくなりつつあり、それをサポートする助成金制度（重要無形文化財として指定されると文化財保護法に基づいて保護される）で成り立っている。

夏至祭は2018年のみ助成金を得て開催した。その費用は半分にも満たなかったが、サポートを受け、そもそもこのお祭りは何を目的に行うのだろうかと考えさせられた（2019年度は辞退している）。収入ではなく、きたい人がくる、遊びたい人が遊ぶ、そのような主体的に動く会にならない限り、続けていくことはできない。鳥取の魅力ある風景や面白いところを発信する努力を続けアーティストへ参加を促していくことはもちろん、主体的に参加し、ともに祭りをつくるようなアーティストも市民も育てていく必要があると感じている。オリンピック関連行事で盛り上がる中（実際に舞台公演の数も非常に増えている）、関東圏のように大きなお祭りを開催することはできない。個人で行う小さな祭りを少しずつ継続させ、人の輪を広げていくことが大事なのではないと感じている。

公共事業としての文化芸術事業は今後増えていくだろう（オリンピック後に減るだろうという予測もあるが、英国のコミュニティダンスの事例（木野2016）を見ても、むしろ国が管理しやすいように「わかりやすく」「人の集まる」かつ健康に良いとされるイベントは擁護されると考えられる）。実際に全国各地でパレードのような野外イベントが年々増えている。大道芸イベントも同様で、しかしその影で登録アーティスト以外の大道芸人は参加できないというライセンスによる障害も起きている。山口（2017）は東京都のヘブンアーティスト制度により、大道芸がイベント化している実態を指摘している。被災地などへ仕事として派遣されるアーティストもいるという。元々大道芸などは自由に道のあちこちで行われていた。ヨーロッパなどでは多くのパフォーマーが観光地などに立ち並ぶ。日本ではそのような姿はなく、多くの広場が許可を必要とする。（また、興行は行えない場合が多い。）夏至祭では大学が関わるということもあり、鳥取市公園・スポーツ協会などに許可申請を行なっているが、柔軟に対応してくださっている。これから規制が厳しくなっていくのだろうか。

かつて暗黒舞踏の発生した当初、土方巽、大野一雄、慶ららが1960年代路地裏や銀座の繁華街など路上でゲリラ的にパフォーマンスを行ったことは伝説の

ように語り継がれている（ウィリアム・クライン『東京』1964）。そのような緩やかさは現代では損なわれてしまった。鳥取にはその自由がまだのこされているとも言えるのかもしれない。

どこからがプロか、アマかという線引きはそのままどこからが日本人で、外国人か、あるいはどこからが障害で健常かといった線引きに似て、多様性を訴える世の中の流れとは逆行しているようだが、それが現代日本の現実である。職業として成り立たないという現実アーティストの海外流出を加速させており、職業化は不可欠という厳しい状況がある。そんな中、この鳥取という場所で行なっているこの小さな祭りは「遊び」に立ち返ることで、観客とアーティストが完全にフラットな状態になる場にはできないかという予感を感じている。桃源郷のように、ゆるやかにのびやかに表現活動を行う人々の精神的支えになるのではないだろうか。

ビショップ（2016）は参加型アートの難しさを指摘しており、一步道を誤るとファシズムのように政治運動化していったり、過激さや話題性を追求するあまり暴力的あるいは性的に過剰に煽るようなパフォーマンスが繰り返してきた歴史を概観している。誰かがリードをするのではなく、全ての人と同じ立場で表現を行うことができる場を作り上げるには、線を引くことではなく、線をぼかしていくことが重要である。そのために「遊び」と「祭」の概念、そして経済効果から一度離れるようなプラットフォームが必要であると考え、筆者はこの祭を開催してきた。今後も自発的に継続していくことで鳥取という地域から発するアートの形を目指していく。

VI まとめ

即興は全ての人々が等しく参加できる可能性を秘めている。巻き込み、巻き込まれながら、表現する楽しさに触れ、観客であり参加者を増やしていくことで柔軟な思考を持ち、あたたかい交流を作り出していくことが出来るだろう。近年演劇を用いたコミュニケーション教育が注目されているが、ダンスや音楽もまた、コミュニケーションの原型であり、即興を用いることで学校教育などにも応用しようと感じている。

夏至祭は、2020年度も開催を予定しているが、前出のいなばのおふくろ市（図5）の開催が危ぶまれるなど変更が余儀なくされている。今後も地域の方々とともにまちを知り、発見する試みを続けて

いこうと思う。もともと多くの芸能はマイノリティによる言葉になりきらない声であり、自らの暮らしや生き方を豊かにするためにあった。経済効果による競争や戦いに進むのではなく、様々な表現を認め合う場づくりを行なっていきたい。

注

- 1 即興 (Improvisation) 楽譜や振り付けといった決まりごとによらず、その場で感じることをもとに作り出していく手法。音楽、ダンス、演劇、美術それぞれに発展しており、特に演劇では即興専門劇団やスタジオも存在し、即興をもとに作品制作を行うことが増えている。(今井, 2013)
- 2 まちなかの公共空間や既存飲食店の中にダンスを展開、観客はまちなかを探索していく。
- 3 横浜の観光名所でもある赤レンガ倉庫前広場で若手振付家のダンス作品を紹介する。木野がはじめた 2007 年当初は赤レンガ倉庫内の移動も含めての即興であったものの、管理 (不特定多数の観客に対する危険性への配慮) や権利 (倉庫前広場が有料化したこと) からセレクトされた作品の上演という現在のスタイルに変更することとなった。
- 4 別府市で開催されているトリエンナーレ (現 In Beppu) . その一環として『ベップダンス』では街中や公民館を劇場空間に変える試みがなされてきた。ジャパンコンテンポラリーダンスネットワーク (JCDN) によるコーディネートの元舞踏などの作品が並ぶ。
- 5 ふじのくに野外芸術フェスタの一環として 2016 年から開始したストリートシアターフェスティバル。ゴールデンウィークに開催し、同日程でふじのくに世界演劇祭を開催することにより遠方からも多くの人が訪れる。1992 年より開催している大道芸ワールドカップと合わせ「まちは劇場」プロジェクトを担っている。
- 6 2009 年開始。六本木のビル群にアートインスタレーション、デザイン、音楽、映像、パフォーマンスなどを含む 80 種もの作品やパフォーマンスを点在させる。
- 7 これらの中でおそらく最も鳥取夏至祭に近い規模のもの。2014 年より北九州市枝光本町商店街アイアンシアターが開催。劇場の経営方針の転換のため、同ディレクターの鄭慶一氏が離れることとなり、2019 年が最後の開催となった。鄭によればサイトスペシフィックな作品ではなく、各劇団、カンパニーの色が出るようにできる限り作り込んだものを持ってきてもらうように依頼していたという。(2020 年 1 月鄭氏への電

話によるインタビュー)

- 8 日本で最初の大道芸フェスティバル。1987 年東横線桜木町駅の閉鎖が決定したことを受け、商店街の集客とイメージ向上を目指して開始した。当時のプロデューサー IKUO 三橋によれば、自身もサーカスパフォーマーとして日仏で活躍しており、その人脈を生かして開始したという。
- 9 『鳥取銀河鉄道祭』(2019) は鳥取県総合芸術文化祭メイン事業として 2019 年 11 月にとりぎん文化会館周辺で開催された。ゲキジョウ実験!!! 『銀河鉄道の夜→』は移動型音楽劇であり、夏至祭の延長上として考案された。
- 10 風紋 vol162, (2019 年夏号 p7-8) に夏至祭を社会貢献として紹介するインタビュー記事が掲載されている。

文献

- ビショップ, クレア 大森俊克訳『人工地獄 現代アートと観客の政治学』フィルムアート社
 フィッシャー=リヒテ.E 中島裕昭他訳 (2009) 『パフォーマンスの美学』論創社 2009
 今井純 (2013) 『キースジョンストンのインプロ』論創社
 神谷浩夫, 山本健太, 和田崇編 (2017) 『ライブパフォーマンスと地域—伝統・芸術・大衆文化』ナカニシヤ出版
 木野彩子 (2016) 『コミュニティダンスの日英の現状から見たプロモーション再考』鳥取大学地域学論集, 13-1, p129-147
 木野彩子 (2017a) 『コミュニティダンスの歴史的原点を求めて—カーニバルと祭りにおける「カオス」の持つ面白さ』鳥取大学地域学論集, 13-3, p109-129
 木野彩子 (2017b) 『コミュニティダンスの基本概念を探る—鶴見俊輔の限界芸術論をもとに』鳥取大学地域学論集, 14-1
 山口晋 (2017) 『東京のヘブナーティスト制度からみるストリートのイベント化』
 吉田隆之 (2019) 『芸術祭と地域づくり—祭りの需要から自発・協働による固有資源化へ』水曜社
 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 (2015) 『Who Dance? 振付のアクチュアリティ』, 展覧会図録
 鳥取夏至祭ホームページ: <https://tottori-geshisai.jimdofree.com> (最終閲覧 2020 年 1 月 27 日)